



暑さをのりこえ・・・

まだまだ暑い毎日が続きますね。8月8日の「立秋」は二十四節気の13番目で、暦の上ではもう秋の始まりです。朝夕が涼しくなり秋の気配が立つ日、という意味があります。季節の挨拶状も、立秋を境に暑中見舞いから残暑見舞いにかわります。たとえ残暑が長引いても、残暑見舞いは8月中旬に届くように送りましょう。相手を想って届けられる便りはうれしいものです。

14番目に迎える「処暑」(今年は8月23日)は、暑さが和らぐという意味です。この頃には、吹く風にもようやく涼しさが感じられ、空を見上げると、いわし雲やうろこ雲が多く見られるようになります。秋の気配は空から少しずつ近づいてくるようです。

9月の大型連休の最終日、9月23日は二十四節気の16番目となる「秋分の日」。この日をなかび中日に、前後の3日を合わせた7日間が彼岸のため「彼岸のちゅうにち中日」とも呼ばれます。暑さ寒さも彼岸まで・・・といわれるように、秋分の日を境に昼が短くなり、徐々に秋の夜長を感じるようになります。

お彼岸といえば「ぼたもち」や「おはぎ」ですが、実はどちらも同じもの。諸説ありますが、秋の彼岸は、萩の花に見立てた少し小ぶりの「お萩」。春の彼岸は、牡丹の花に見立てた大きめの「牡丹餅」と、季節や大きさで使い分けて呼ばれています。季節を意識した日本らしい風流な呼び名は、これからも残していきたいものです。

いつも何気なく眺めているカレンダーに書かれた二十四節気の言葉。それぞれの節気の意味を知っていると、季節がより味わい深いものになるかも知れません。



浴衣で花火大会を楽しむつもりのみどりちゃん。浴衣の襟はどう合わせましょう？

浴衣の歴史

浴衣の語源は、平安時代、入浴時に着ていた麻素材の「湯帷子」といわれています。その後、湯上りや寝間着として着られるようになりました。江戸中期以降は、銭湯が普及したことから、風通しの良い木綿素材の外出着としても定着していきました。現代も、お祭りなどで浴衣のおしゃれを楽しんでいる方は、目を引きますね。



ただし、あくまでも日常着です。結婚式などのフォーマルな場にはそぐわないのはもちろん、宿泊施設でも館内の決まりにそった着用をしましょう。

襟の合わせ方は？

日本の着物は、男女共に「右前合わせ」に着付けるのが一般的です。

ここでいう「前」とは、「先に行く」ということ。右側の布地が下になる着方です。

昔は、メモ帳、ティッシュ、お皿の代わりなど、さまざまな用途で使う懐紙を襟元に入れておく習慣がありました。懐紙を取り出すには、右手が着物の襟元に入りやすいように着ていたと覚えるのもよいですね。

湯上りに浴衣を着て、うちわを片手に小粋な夕涼みを楽しんでみてはいかがでしょうか？

